

泰一郎・きち・雅休



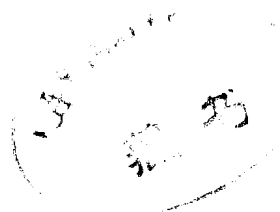
みやま文庫

265437



日文 701737945

泰一郎・きち・雅休



みやま文庫

泰一郎・きち・雅休 (みやま文庫78)

昭和55年7月1日印刷
昭和55年7月10日発行

会員頒布(会費年間2,800円)

執筆者代表	大	井	恵	夫
発行者代表	星	野	光	
印刷所	株式会社開文社印刷所			

発行所 みやま文庫

371 前橋市日吉町一丁目14～8
群馬県立図書館内

昭和55年度第1回配本

目

次

群馬の短歌的風土……………大井恵夫…1

須藤泰一郎

赤城の歌人―泰一郎……………関口克巳…11

一家郷望景

粕川と赤城山……………11

月田の鎮守祭り……………14

泰一郎の生家……………16

名僧快道と須藤家……………19

父貞作と須藤家の人々……………22

二青春有情

囲炉裏……………27

伊保多の梵代……………31

白藤の岡	36
共鳴団	40
深町の新居	42

歌人・泰一郎	47
川浦三四郎	47

その一 『瑞垣』のこと	47
(一) 足菱以前	47
(二) 松葉づゑ	51
(三) 赤城山	53
(四) 黄塵集	58
(五) 帰去来	60
その二 城山堂時代のこと	63
その三 晩年のこと	73
須藤泰一郎年譜	83
川浦三四郎	83

江口きち

江口きちの生涯……………草原三郎……………87

一 父母のこと……………87

二 娘たちの風土……………95

三 悶絶の恋……………108

四 青春死への道のり……………124

作品よりみたきち……………原一雄……………137

一 きちの歌歴……………137

二 作品からみたきち……………141

三 きちの真価……………169

江口きち年譜……………草原三郎……………176

大 沢 雅 休

雅休あれこれ……………神保冷平……………179

上京まで……………179

人との出会い……………187

『野菊』決戦版……………192

棟方志功と雅休……………198

雅休抄……………200

雅休―人と作品……………大井恵夫……………206

雅休素描……………206

『アララギ』の時代……………220

雅休と北海道……………228

『野菊』創刊……………237

上京以後……………245

大沢雅休年譜……………大井恵夫……………252

関係資料……………井田金次郎……………257

あとがき

群馬の短歌的風土

——三歌人とその時代を中心に——

大井 恵 夫

古来、群馬は「歌の国」としての伝統を誇り、明治以降にもすぐれた詩人や歌人を生んできた。東国文化の中心地であったことを語る「上野国歌」を初め、近代詩・歌壇史の一ページを飾る何人もの文学者を、身近に想起することができる。

それに、山と川と平野の織りなす本県の風土は、四季おりおりの変化に富んでいる。そうした風土と住民の豊かな交感が、万葉集にはこう歌われていた。

伊香保嶺に雷な鳴りそねわが上には故は無けども兎らによりてそ

三四二一

伊香保風吹く日吹かぬ日ありといへど吾が恋のみし時無かりけり

三四二二

伊香保の山に雷よ鳴らないでくれ。私には何のわけもないのだが、私の恋人が雷を嫌うから

ですよ。

伊香保風は吹く日吹かぬ日があるというけれど、私の恋心ばかりはいつという定まった時もなくわきおこってくる。

「伊香保嶺」というのは、当時、榛名山を総称した呼称で、伊香保に関する歌は九首ほどある。伊香保が上野国府に近く、その周辺住民から親しまれていた山ということでもあろう。それらの歌は、「伊香保ろの岨の榛原」、「伊香保の沼（榛名湖）」、「伊香保の嶺ろの雪」などを歌いこみ、その風土と人間の生活とが密着した作品である。引用歌の「伊香保嶺に雷な鳴りそね」といった表現も、山麓住民の生活実感に即したものである。

「伊香保」の地名は、「巖つ秀（巖つ峰）つまり、「いかめしくそびえ立った山」の意味で、一説には、「いはお（巖・岩山）」ともいわれる。また、「伊香保嶺」の最高峰「相馬嶽」は、「いかつちのほ」（雷の峰）と呼ばれていた。これらの諸峰を朝夕に仰いだ古代人が、おそらく畏敬の念をもってそう呼んだのであろう。

上野国府の庁は、今の前橋市元総社に置かれていたという。その地の一角に立って、伊香保の山を眺めたとき、左手から右へ、天狗山・三つ峰・富士山・相馬山・浅間山（水沢山）とこれを一望の中に収めることができる。文字どおりの「巖つ峰」に真向かっていると、「伊香保風」、「伊香

保嶺の雷」と万葉集に歌われた、詩的風土の重さを覚える。もちろん、「上野国歌」と「近代短歌」とを同一視することはできない。が、風や雷に語りかけ、呼びかけた古代人の心は、群馬の特異な文学土壌として今日に受け継がれている。

本書において取りあげた三人の歌人（須藤泰一郎、大沢雅休、江口きち）も、このような上州の風土から生まれた歌人たちである。

ふるさとやわが毛の国の赤城山日に見つつ常めづらしき

須藤泰一郎

ふたつ岳ふたつならびて父母のいよよ恋ほしきこの日暮かも

大沢 雅休

武尊根は吾が生れどころ小さきいのちいのち終らば眠らむところ

江口 きち

泰一郎は勢多郡粕川村に生まれ、「赤城の歌人」といわれるほど赤城山を歌い、高崎市柴崎生まれの雅休は、幼時より赤城、榛名の山を仰いで育った。きちは、遺稿集「武尊の麓」が語るように、武尊の山裾の村に短い生涯を終えている。

なお、三人の生没年は次のとおりである。

須藤泰一郎 明治二十二年（一八八九）～昭和八年（一九三三）

大沢 雅休 明治二十三年（一八九〇）―昭和二十八年（一九五三）

江口 きち 大正三年（一九一四）―昭和十三年（一九三八）

群馬の近代短歌史を概観するとき、これを三期に分けて考察することができる。本県に和歌革新運動の及んできた明治三十年代後半を揺籃期。大正より昭和十年代にかけての時代を、その開花・充実期。そして、第二次世界大戦後を戦後短歌の時代と捉える見方である。

革新前、つまり明治二十年（一八八七）ごろまでの歌壇は、桂園派の歌風が主流をなしていた。いわゆる新派和歌に対する旧派和歌であり、県内歌人の多くは、趣味的な歌作りとして旧派和歌を学んでいた。旧派の趣向的な観念歌を排し、実物及び実景による感情を歌え、というのが和歌改良論の骨子であった。いちはやくこの改良論を唱え、革新運動を進めたのは落合直文である。直文は明治二十六年（一八九三）に「あさ香社」を結成、直文のもとには多くの若い歌人が集まった。与謝野鉄幹、尾上柴舟、金子薫園らである。あさ香社の若手歌人のうち、与謝野鉄幹は最も革新的な気概を持ち行動的であった。鉄幹は明治二十七年（一八九四）「亡国の音」を「二六新報」に発表、桂園派（旧派）の歌を攻撃し和歌革新の旧先鋒となった。彼の主張は、旧派の歌が柔弱で女性的な亡国の響きを持っていると難じ、勇壮な男子の歌（ますらをぶり）を作るべし、というものであった。この主張は、日清戦争前後の、国家主義的な時代思潮を背景に、広く世に

受け入れられていった。こうして鉄幹は、明治三十二年（一八九九）に「新詩社」を結成、翌年「新詩社」の機関誌『明星』を創刊する。また三十一年には、旧派歌人を父に持つ佐々木信綱が、父弘綱の結社「竹柏会」を継承し雑誌『心の花』を創刊している。機関誌こそ出さなかったが、正岡子規の「根岸短歌会」も三十二年に結成され、和歌革新運動はこのころ着々と進められていた。

こうした中央歌壇の動きは、やがて全国各地へと波及していく。特に『明星』は、創刊当初の意図へ詩歌を中心とする、青少年対象の啓蒙的な文芸雑誌もあり、第一・二号には「中学時代」の欄を特設して誌友の拡張に努めた。このため中学生向けに柔道やボートの記事まで載せていたほどである。

この結果、六号（明33・9・12・発行）では、新詩社清規を改正するまでに飛躍を遂げた。十三章より成る改正清規の一部を引用してみよう。

一、われらは互に自我の詩を発揮せんとす。われらの詩は古人の詩を模倣するにあらず、われらの詩なり。否、われら一人一人の発明したる詩なり。

一、われらの詩は国詩と称すれども、新しき国詩なり。明治の国詩なり。万葉集古今集等の系統を脱したる国詩なり。

一、われらは詩の内容たる趣味に於て、詩の外形たる調諧に於て、ともに自我独創の詩を楽しむなり。

といった意気軒昂たるもので、「自我の詩」「明治の国詩」「自我独創の詩」を強調している。そして、改正清規の最後二章を、「新詩社には社友の交情ありて師弟の關係なし」「去るものは追はず、来るものは拒まず」と結んだのである。

このような、人の意表をつく表現が青年に迎えられたのか、新詩社は三十年代の歌壇を代表する結社にまで伸展した。自由で開放的な清規は、青年の心をとらえるに十分だったろう。「自我の詩」ということは、個人主義的自我の解放をその主張として強烈な浪漫主義の方向をとった。これも夢多き青年をひきつけたのであろう。

ところで、『明星』創刊後間もない十二号（明34・5・25発行）に、早くも群馬の青年の歌二首が載った。富岡の鈴木旭山（伝三郎）の作品である。いうまでもなく、群馬における近代短歌第一号であった。旭山に影響されて、新井不朽（通太郎）も投稿を始める。詩人の平井晩村、萩原朔太郎らも『明星』派の歌風にふれることで、それぞれ文学的出発をしている。当時、『明星』に歌を発表した青年たちは、山同輩雨、碓井武寿、町田新三郎、桑原とし子、桑原正信、萩原朔太郎、新井勘司、坂梨春水らである。

また、明治三十五年（一九〇二）十一月、中央の文芸誌『新声』の上毛誌友会が開かれ、県内の若い文芸愛好家たちの交流があった。この会は晩村が企画し、東京から田中擲亭、平福百穂が来賓として出席している。さらに明治三十七年（一九〇四）八月の「新詩社夏季清遊会」も、これらの青年たちを刺激した。与謝野鉄幹、平野万里ら新詩社の歌人が来県、吟行を兼ね赤城へ登ったのである。

明治四十年（一九〇七）には、こうした『明星』派のあとを追って、根岸派の写生主義短歌が群馬へもたらされた。この年五月、旧制高崎中学（現・高校）へ赴任した国語教師村上成之^{なりゆき}によってである。彼は伊藤左千夫と親しい歌人であった。成之は高崎在住の俳人（ホトトギス派）村上鬼城とともに「紫苑会^{しおんかい}」を起こし、広く自然主義文学の普及に努めた。「紫苑会」は俳句の研究を主としたが、群馬における写生主義のメッカでもあり、県歌壇・俳壇に多くの人材を送っている。大沢雅休もその一人である。

日露戦争（一九〇四～一九〇五）後の文壇は、自然主義思潮が主流を占め、歌壇も浪漫主義に代わり写生主義の時代に入った。全盛を誇った『明星』も、百号（明41・11）を出して終刊。子規の歌風を継ぐ『アララギ』が歌壇の主導権を持つのである。『アララギ』の拡張期は、大正から昭和の初期にかけてであり、群馬の歌壇もほぼこれと同じ歩みをしている。地方の文学青年が、中央の文芸思潮に敏感に反応するのは、旭山らの動きにも明らかである。そしてその多くは投書

家でもあった。それは『新声』上毛誌友会の例からも理解できよう。彼らは中央文芸詩への投書家時代を経て、各自の文学を持つようになるのである。泰一郎や雅休も、そうした一時期を経て、自分の道を見出していった。二人の投稿誌をあげれば、『中学文壇』『心の花』『アララギ』『水鏡』（泰一郎）『ホトトギス』『アララギ』（雅休）である。

大正時代に入ると、『アララギ』の写実主義が歌壇を制してゆくのであるが、反面、この時期にアンチ『アララギ』の結社誌もいくつか生まれた。それら「諸派」と呼ばれるものは、地方に誌勢拡張の場を求めたので、県内歌人もこれらの歌誌に属するようになった。中でも橋田東声の『霸王樹』は、主宰者東声の積極的な来県指導もあり、県内に多数の会員を持った。泰一郎と雅休を結びつけたのも『霸王樹』である。

雅休は、鬼城、成之の「紫苑会」により自然主義文学の目を開かれるが、大正九年（一九二〇）橋田東声を知り同人として『霸王樹』に入社、作歌活動が続けていた。泰一郎も、雅休同様『アララギ』への投稿時代があり、須藤美土里の筆名で投稿した大正二・三年ごろの歌は、斎藤茂吉に認められ将来を嘱望されていた。北原放二の『キツネノス』創刊（大・五）にも同人として参加、歌人泰一郎の名声は県内歌人の注目するところとなっており、東声は住谷三郎を通じ泰一郎の『霸王樹』入会を慫慂（しんよう）、三郎は大正九年十月、泰一郎を粕川村にたずねている。